

〈資料紹介〉

今金町「読書と作文のまちづくり」活動報告

伊藤公紀^{*1} 小川ひとみ^{*2} 坂本孝子^{*2}
鷺野咲恵^{*2} 田名部圭一^{*2} 鹿内信善^{*3}

1 活動の位置づけと方向性

1.1 本稿の位置づけ

望月 (2009) は「国語科教育学の今後」を考えるための8つの観点をあげている。そのひとつが国語教育を媒介とした「学校・行政・大学・一般社会」の連携である (本稿では「一般社会」を「地域」に置き換えていく)。望月は、このことについてさらに次のように述べている。「その『連携』の本格的な試みは漸く始まったばかりである。現状は、『連携』に関心のある者の多くも『自分の立場からの物言い』に止まっている段階であることを直視したい。」

要するに、国語教育の力によって「学校・行政・大学・地域」をつないでいく試みは、ほとんど未開拓のままになっているのである。本稿は、この未開拓領域を切り拓いていく試みの報告である。

1.2 ビジョンとコンセプト

筆者らは、北海道今金町をフィールドにして実践研究を行っている。本実践研究のビジョンとコンセプトについては、すでに鹿内 (2013) で簡単な紹介を行っている。それも引用しながら、今金町の取り組みを解説していく。

本研究を始めるために、3年近い時間をかけて周到な準備を重ねてきた。鹿内は、本研究のフィールドとなる今金町の行政・地域・学校に対して積極的な関わりや支援を行ってきた。行政に対しては、次のような支援を行ってきた。教委主催の「学びのキャンプ」へ

^{*1} 札幌大学地域共創学群経営学系

^{*2} 今金町読書と作文のまちワーキングチーム

^{*3} 北海道教育大学教育心理学研究室

のコンテンツ提供・学生派遣によるサービスラーニングの実践・町内各学校に配置する特別支援員の人材提供、等々。地域住民には、親学講座等の生涯学習支援を行ってきた。学校に対しての支援も行っている。鹿内は「協同と創造の授業づくり研究会」を主宰している。この会によって、今金町学校教員の資質向上に貢献している。この会に参加している教員は、今金町教育の中核になっている。これらの活動を行うため、鹿内はこの準備期間中に何度も今金町に赴いている。さらに、今金町からは、教育長をはじめとする教委スタッフが何度も鹿内の研究室に足を運び、研修を受けている。それによって「自らも学ぶ教育行政」を標榜できる今金町の態勢もつくり上げた。

以上の活動によって、相互の信頼関係に基づく、大学と今金町（行政・学校・地域）との連携が可能になった。そのため、2012年度末に、「国語教育で学校・行政・地域・大学をつないでいくためのビジョン」を、鹿内から今金町に提案した。そのビジョンを実現するためのキーコンセプトが「読書と作文のまちづくり」である。

この提案を受けて今金町は、「読書と作文のまちづくりワーキングチーム（以下『ワーキングチーム』）」を発足させた。このワーキングチームには、小中学校教員・PTA 会員から、読み聞かせサークル会員・スポーツ指導者まで、今金町の教育と文化を動かしている主立ったメンバーが参加している。

1.3 「知のトラスト」の育成

グラウンドワークシステムを取り入れた「まちづくり」活動が、様々なところで行われている（たとえば渡辺 2005）。このシステムでは「トラスト」とよばれる専門組織が重要な役割を果たす。トラストは市民・行政・企業のパートナーシップをつくり出し、環境改善によるまちづくりを行っていく。鹿内は、グラウンドワークシステムを「読書と作文のまちづくり」のモデルにして活動をマネージしている。活動が2年目（2014年度）に入り、ワーキングチームは「知のトラスト」としての機能を十分に果たすようになってきた。「知のトラスト」は学校・行政・地域・大学のパートナーシップをつくり出す役割を担う。同時に、様々なスキルを駆使して「読書と作文のまちづくり」活動を展開していく。

次章では、ワーキングチームが「知のトラスト」として行ってきた、2014年度の活動を紹介していく。

2 「知のトラスト」としての活動 — 2014年度を中心にして—

2.1 今金町での実践

今金町は北海道渡島半島の北部に位置し、農業を基幹産業とする人口約6000人の町である。同町では児童生徒の学力向上をめざし、その推進を図るために平成24年度に「読書と作文のまち」ワーキングチームを設置している。ワーキングチームは行政・学校・市民の構成メンバーそれぞれのレベルで教育環境改善を推進することをねらいとしている。そこで用いられるキーコンセプトは「読書と作文」であり、それを支えているのは本稿の第6筆者の鹿内が中心となって開発を続けている「看図アプローチ」である（看図アプローチの概略は3.4.1を参照のこと）。

「読書と作文のまち」は今金町によって以下のように説明されている。

児童生徒の学力向上や望ましい学習・生活習慣の定着に重点を置き、想像力や表現力を養い集中して課題に取り組む力を身につけるため「読書と作文のまち」を共通推進テーマとし、「学校・家庭・地域・行政」それぞれの役割を明確にし広く推進するもの。

比較的永続的にその効果を保持し続けるためには、その取組が行政だけではなく地域社会や各家庭で持続的に行われる必要があるといえる。重要なのは読書と作文を楽しむ住民（児童生徒を含む）を増加させ、よりよい学習環境を構築していくことである。そのため町の全体をあげた取り組みの成否の記録は、同様な取り組みを行う他の自治体・地域社会、学校現場にとって重要な情報となるであろう。

本章では、今金町が現在町全体で取り組んでいる「読書と作文のまち」の主として住民の活動結果を報告する。

2.2 主な活動内容

2.2.1 刺しゅうハンカチづくりと羊毛フェルトフィギュアづくり体験

学習者に読書感想文を書かせると、その行為そのものが原因となって読書嫌いになってしまうことがある。しかし、読後に印象に残ったイメージ等を感想文とは別の「楽しい」活動として発信させると読書嫌いになることを抑えられる。楽しい活動のレパートリーとして今回は、刺しゅうハンカチづくりと羊毛フェルトフィギュアづくりを行った。講師と

して大学側研究チームから石田ゆきを派遣した。

集団でコミュニケーションをとりながら刺しゅうハンカチづくりやフィギュアづくりをすることは、創造的思考を形に表現する活動といえる。そのプロセスが楽しい経験となれば、不読者にも読書に対する肯定的な態度を育成する可能性がある。

表1 デジタルミシンの使い方および羊毛フェルトを使用した刺しゅう

開催日時	2014年5月31日, 6月1日
場所	今金町民センター
内容	① デジタルミシンを利用したハンカチづくり ② 羊毛フェルトを使用したインシャルのデザイン化 ③ 羊毛フェルトフィギュアづくり
参加人数	5月31日:24人, 6月1日:12人



図1 活動の様子

2.2.2 読書と作文のまち推進懇談会

今金町において活動が続けられている「読書と作文のまち」の取り組みを、家庭・学校・地域・行政のそれぞれの立場から意見・情報交換を行った（表2）。参加者は「読書と作文のまち」ワーキングチームメンバー、図書振興会議メンバー、今金町教育委員会メンバーである。これに大学側から鹿内が参加した。

表2 読書と作文のまち推進懇談会

開催日時	2014年9月29日
場所	今金町役場
内容	取り組みの進捗状況の確認・交流および鹿内からのアドバイス
参加人数	22人

取り上げられた議題は以下のとおりである（詳細は省略する）。

家庭・地域

- ・ファミリールネッサンス（日記）
- ・大人のためのお話し会
- ・家庭地域委員における検討会議
- ・図書ポイント制「としょぼ」
- ・写真絵本づくり

学校

- ・今金中学校看図作文公開授業（今金中学校第2学年）
- ・女性文化祭国語サークル協力（看図コミュニケーション）
- ・中学校図書館整備

行政

- ・第1回・第2回ワーキングチーム会議の開催
- ・研修会（創作体験活動・学校図書館研修会）
- ・土曜日授業（イマカレわくわく読書体験）
- ・おはなしの世界
- ・檜山女性大会（看図を用いたコミュニケーション講座）
- ・各種事業での振り返り
- ・学校司書（中学校図書館整備も含む）

- ・日本ハムファイターズ展
- ・情報発信（図書だより・図書室ブース・HP）

2.2.3 大人のためのお話し会

「大人のためのお話し会」は、小川ひとみ、坂本孝子、鷺野咲恵らが中心となり2014年度に2回開催された。この活動の中で紹介された本を後日図書館に借りに訪れるなど、図書館の利用頻度増加への波及的影響も伺えた。

表3 第1回大人のためのお話し会

開催日時	2014年8月6日 19:00～20:30
場所	今金町民センター
テーマ	平和
参加人数	20人

表4 第2回大人のためのお話し会

開催日時	2014年10月16日 19:00～20:00
場所	今金町民センター
テーマ	子育て
参加人数	15人



図2 第1回の活動の様子



図3 第2回の活動の様子

2.2.4 第61回檜山女性大会コミュニケーション教室

檜山女性大会の趣旨は大会開催要項によれば以下のように説明されている。「檜山の女性が一堂に会し、生涯にわたって心豊かな生活を送るため、地域を取り巻く様々な課題解決を目指し、より効果的な学習と実践活動を進める。」

大会プログラムの「体験講座」のひとつとして「コミュニケーション教室～見ることを楽しみ、書くことを喜ぶ～」が実施された。詳細については3.4で報告する。

表5 檜山女性大会

開催日時	2014年6月29日 9:00～16:00
場所	今金町民センター
備考	4つの体験講座（13:30～15:00）の中の1つとして実施

2.2.5 デジタルカメラで写真絵本づくり

自然と共存する大切さを学び、親子や子ども達、地域の交流を深める場として、今金小学校PTAの主催による子育て集会「写真絵本づくり」の講習会が下記のように開催された。この活動で作成された写真絵本は同年11月22日の「第11回いまかね図書まつり」にて展示された。

表6 今金小学校PTA子育て集会

開催日時	2014年11月16日 9:30～15:00
場所	今金小学校体育館
主催	今金小学校PTA
後援	今金町教育委員会、今金町人づくり推進会議、今金っ子育成プロジェクト「読書と作文のまち」ワーキングチーム
講師	写真家 小寺卓矢氏

2.2.6 町民センター図書室の情報発信ブース

町民センターに設置されている図書室は、「読書と作文のまち」の取り組みに関連する活動の情報発信場ブースが設置されている。提示物は数ヶ月おきに変更されている。これまでブースに設置された提示物は以下のとおりである。

- ・今金わくわくカレッジ「イマカレ」わくわく読書体験
- ・ハンカチづくりとフェルトフィギュアづくり (図4)
- ・檜山女性大会「看图コミュニケーション講座」(図6)
- ・第1回大人のためのお話し会 (図5)
- ・今金中学校「看图作文公開授業」
- ・図書ポイント制度「としよぼ」
- ・第2回大人のためのお話し会



図4 情報発信ブース (1)



図5 情報発信ブース (2)



図6 情報発信ブース (3)

2.2.7 行政からの情報発信

「読書と作文のまち」のワーキングチームが発足したのは2012年度であり、準備期間である2013年度を経てその活動は2014年度に本格化している。

今金町教育委員会は「読書と作文のまち」の取り組みの様子をWeb Siteにて公開している。同Siteでは教育長の編集による情報誌として「こんにちは！教育委員です」が月1回発行されている（図7）。活動が本格化した平成26年度以降の上記の情報誌は紙面が一新され、行政としても「読書と作文のまち」の取り組みに力を注いでいることが伺える。情報誌「こんにちは！教育委員です」の掲載Siteは以下のとおりである。

<http://www.town.imakane.lg.jp/edu/kawara/>

「こんにちは！教育委員です」

挑戦続ける「カーリングママ」
小笠原 歩選手 記念講演開催!

ソチ冬季オリンピックで活躍したカーリング女子日本代表の小笠原歩選手の講演が、6月21日(土)、今金町民センターで行われました。小笠原さんには、カーリングの魅力や子育てをしながら挑戦するママさんアスリートの思いを語って頂きました。

この事業は、今金町女性団体連絡協議会(中野君代会長)設立60周年と今金町青年会議所(山崎周一会長)設立40周年を記念し企画されました。講演は中島光弘教育長を聞き手にしたトークショー形式で行われました。

小笠原さんは、「小さな体でも世界と戦える競技」と、カーリングの魅力を語ってくれました。「教員になるか競技を続けるか」悩んだ時のエピソードも印象に残りました。その時、お嬢さんが「オリンピックに出ることは東大に合格するより難しい」とアドバイスしてくれたそうです。講演の最後に4年後の韓国で開催されるオリンピックを目指す決意が語られると、200人の聴衆から大きな拍手が贈られました。

第61回楡山女性大会今金会場
「看図作文を用いたコミュニケーション教室」
見ることを楽しみ書くことを喜ぶ

6月29日(日)に楡山女性大会が開催され、今金町に楡山管内各町から200名の女性が集まりました。大会の体験講座のひとつとして、今金町の子どもたちが授業等で体験している「看図作文」の手法を使ったコミュニケーション教室を実施しました。看図作文とは絵図を見て作文を書く手法で、絵図をよく見ることで発見が生れ書けることにつながる手法です。今金町女性団体連絡協議会の役員は、これまで何度か看図作文を体験しています。今金町役員から「面白いから楡山女性大会で実施したい!」との声があり実施することになりました。

大会当日の講師は今金小学校教諭の田名部圭一氏・原田紗穂里氏です。参加者には、小グループに分かれて活動してもらいました。最初は、普段自分が秘密にしていることを「絵図」に表しながらグループ交流をしました。タンスにへそくりを貯め込んでいる絵図を描く人などユニークな発想が絵図に表現されていました。

この体験講座では、看図作文の手法で終始会話が途切れることなく盛り上がっていました。看図作文が、人と人をつなぐ大切なコミュニケーションツールであることも体験させて頂きました。

参加者のひとりが「今の子どもたちは幸せ!若い先生とこんな楽しい授業が出来るのだから」と言っていました。今回の体験講座が素晴らしい学びにつながったことがこの言葉に込められていたのではないのでしょうか。講師をお引き受け頂きました田名部先生、原田先生本当にありがとうございました。

今金ふるさと塾
コミュニケーション研修会

6月28日(土)今金町民センターにおいて、「今金ふるさと塾」の活動として、コミュニケーション研修会が行われました。講師は、フリーアナウンサー・鶴羽佳さんです。

町内の20代から30代の青年男女30名が参加しました。参加者は、農業青年、教職員、A職員や保育士、現場職員など様々な職場で活躍している方々です。二人一組で会話のレッスンなど行い、婚活にも役立つ会話力を磨きました。

当日、講師の鶴羽さんが喉を痛めて声が出ない状態であったため、アドバイスなどは筆談形式で行い

発行:今金町教育委員の会
〒049-4393 北海道瀬棚郡今金町字今金48-1
tel:0137-82-3488 [No.129] H26(2014).7.22
E-mail:mitsuhiro.nakajima@town.imakane.lg.jp

図7 「こんにちは！教育委員です」(No.129の一部。実物はカラー)

3 活動の発展可能性

前章で見てきたように、今金町における「読書と作文のまちづくり」活動は活発に行われている。この活動は、さらに発展していく可能性をもったものである。本章では、「今金町読書と作文のまちづくり」活動の発展可能性について考察していく。

考察の手掛かりとするため、ワーキングチームの中から4名を選び、原稿執筆を依頼した。依頼原稿のテーマは、鹿内が設定した。ただし、そのテーマは、執筆依頼したワーキングチームメンバーの活動内容と関わりの深いものである。2014年9月29日に、今金町役場を会場にして「今金読書と作文のまち懇談会」が開かれた。懇談会の概略は前章で紹介してある。この懇談会では、ワーキングチームメンバーの取り組みの相互共有がなされた。鹿内が執筆者に依頼したテーマは、懇談会の中で各執筆者が発表した内容がもとになっている。

3.1 枠を越えて取り組む

まず、小川ひとみの寄稿文から見ていく。小川は、豆腐店を家業としながら読み聞かせサークル「マザーズぼけっと」の会員としても活動している。また、2014年度から「読書と作文のまちづくりワーキングチーム」の代表としても活動している。2013年度は、今金小学校の教員が代表を務めていた。この教員が町外に転出したため、小川が代表を務めることになった。なお、寄稿文中の節番号と節見出しは、考察に活用するため鹿内が執筆したものである。

「枠を越えて取り組む読書と作文のまちづくり」

小川ひとみ

1. 培ってきたものをいかす

1年前の私は、読書と作文のまちワーキングチームの活動への姿勢が、受け身だったと反省しています。何をすればいいのだろう。何ができるのだろう。問いかけの中から、唯一見い出せたのが、自分のボランティア活動とのつながりでした。自分達の活動も、ワーキングの活動の1つなんだと気づきました。活動していく中で、読書と作文のまちづくりを意識していくようになりました。

すでに、今金町は11年前から、図書室の充実と図書振興に力をいれてきました。偶然にも、私達の活動もこのころ始まり、バックアップをしていただいています。年に1度開催される図書まつりが、これを象徴しています。こどもの学力向上からうまれた読書と作文のまちワーキングチームですが、その基礎はあったのです。当たり前

になりすぎて、これまでに培われてきたものを見過ごしていました。言い換えれば、この基盤があったからこそ、読書と作文のまちづくりがうまれてきたのだと気づかされました。前置きが長くなりましたが、これからは、具体的な活動にふれていきたいと思えます。

2. 思いの枠をこえていく

新年度に入ってから、受け身の自分を捨てました。とにかく、「地域」のワーキングのメンバーがやりたいことを実践していこうと決めました。行政もメンバーも、それぞれの立場の枠をこえて、純粹に真剣に、なおかつ楽しみながら、向き合ってくれました。そして、誕生したのが、図書館のポイント制「としょぼ」です。2年間あたためた念願の事業です。こどもだけでなく、おとなも参加して、町ぐるみで取り組みます。毎回毎回、話がとぎれることない楽しい会議で、年度途中でも試験的に始めることにしました。

この事業は学校、幼児教育施設、町の図書室と、枠をこえて、展開しなければなりません。足を運びご協力を仰ぎました。そして、思っていた以上の反応をいただきました。問題点を考えてくれて、やらされるのではなく、一緒にやってくれるという思いを感じました。学校、地域というかたちの枠はもちろんですが、気持ち思いの枠をこえられたかなと思います。この活動は、思っていた以上に大人の反応がよく、本の貸し出し数も増えているようです。試験期間を参考に、長く続く事業になるように、育てていきたいと思っています。

3. やりたい人がすぐにやる

次にやりたいこと。大人のおはなし会です。すぐ、手が上がりました。まずは、期間もなかったので、かねてから、やりたいと盛り上がっていた仲間を手伝ってもらいました。ワーキングのメンバーにこだわらず、枠を考えずにやりたいことにこだわりました。聞きたい人に聞いてもらえたかなと、満足しています。ワーキングチーム発信の事業ですが、やりかたは、ワーキングチームの枠を超えて、やりたい人にやってもらうことにしています。

誰でも企画する側になれる、自由なおはなし会にできればと思います。第1回は、戦争をテーマにしたので、年齢層は、高かったです。2回目は、子育てがテーマなので、若いお母さんがきてくれました。企画する側が、楽しくやっているのだから、きてくれるかたにも楽しんでいただいています。規模は小さく、回数を多くして、多くのかたに

関わっていただける事業にしていきたいと思います。自然に、枠をこえた活動になってくると思います。次、そして、その次まで、やりたい人の手が挙がっています。このように、活動の形が見えてくると、活動の広がりもでてくることに、驚かされます。「枠」といっても、いろいろあります。組織・立場・生活・年代・人間関係など。でも、1つ1つの人のつながり、1つ1つの出来事をつなぐを大切にしていけば、思いは、すべての枠をこえて、自然につながっていくと感じています。

4. 地域活動の明るい未来

最後に、「読書と作文のまちいまかね」らしい図書まつりをご紹介します。年1回、開催されます。年齢・職業をこえて、実行委員になって、それぞれの得意分野で、活躍してくれます。民間も行政も一緒になってのボランティア活動です。今年で、11回を数えます。もっともっと、この場をワーキングチームとして、活用していきたいと思っています。余談ですが、私はインフルエンザにかかりこしは、出られませんでした。私があけた人形劇の穴を、うめてくれたのが、ワーキングの仲間です。これは、ワーキングチームの活動の成果かなと感じたエピソードでした。いままでの活動で作りあげた人間関係を大切に、またそれを広げて、読書と作文のまちづくりに貢献できる活動をしていきたいと思っています。地域活動に、明るい未来を感じています。

3.1.1 「培ってきたものをいかす」からの考察

小川の寄稿文をもとに考察をすすめていく。小川の文章から、次のことがわかる。今金町では、11年前から、教育委員会等が主導し、図書振興に力を入れてきた。偶然同じ頃、小川たちも、読み聞かせサークル活動を始めた。教育行政と地域住民の読書に関わる取り組みが11年間精力的に続けられてきた。そこに「読書と作文のまちづくり」というコンセプトをうまくのせることができた。

「読書と作文のまちづくり」というコンセプトは、大学側（鹿内）から提案されたものである。しかし、この提案を受け入れるしっかりした基礎が、今金町の行政にも地域にもできていた。そのことに、「読書と作文のまちづくりワーキングチーム」の代表となった小川は気づいたのである。

3.1.2 「思いの枠をこえていく」からの考察

「図書ポイント制」のような試みは、心理学的には、いくつかの懸念を引き起こす。例えば、読書活動が外発的動機によって引き起こされかねない、ということなどは、その懸念の代

表的なものであろう。

しかし、ここで注目すべきなのは、「図書ポイント制」を導入することはワーキングチームの内発的動機から生まれてきている、ということである。さらに小川たちは、図書ポイント制に「枠をこえる」という付加価値をもたせることに成功している。図書ポイント制によって、「読書と作文のまちづくり」活動を、ワーキングチームだけの閉じた活動でなくしようとしている。そのような意欲が、「気持ち思いの枠をこえられた」ということばに表現されている。「図書ポイント制」は単純に「外発的動機づけ機能」を意図しての導入ではない。枠をこえた活動にしていく可能性をもった「図書ポイント制」の取り組みの今後を見守りたい。

3.1.3 「やりたい人がすぐにやる」からの考察

小川は次のように書いている。「次にやりたいこと。大人のおはなし会です。」この記述も、今金町の取り組みが意味あるものになっていることを示している。川嶋（1998）は、芦澤一洋との会話を紹介している。芦澤は『バックパッキング入門』の著者として知られている。川嶋との会話の中で芦澤は次のように発言している。「日本は、何でも子ども文化なんだ。子どもが喜ぶものには、ものすごくお金をかけて立派なものができる。でも、大人が楽しめる大人の文化っていうのは、本当に育っていない。（川嶋 1998, pp.75{76}）」

小川たちの「読書と作文のまちづくり」活動は、芦澤のこの主張を越えて「子どもも大人も楽しめる文化」に育ってきている。

3.1.4 「地域活動の明るい未来」からの考察

川嶋(1998)はまた次のように主張している。少し長くなるが引用する。「資本、行政の支援、アイデアや企画力、確かにそれらも必要だ。必要だけれど、もっと大事なことがある。それは、いい古された言葉かもしれないけれど、やっぱり、その土地に暮らす人たちの地域にかける情熱、そしてその土地への愛なのではないだろうか。自分たちが住みたいまち、子どもたちに残したいまちをつくりたいと心から願う人たちの気持ちがあれば、いくらお金やハードやアイデアがあっても何も生まれない。（p.100）」

小川らは今金町に暮らす人たちである。その人たちの地域にかける情熱が「地域活動に、明るい未来を感じています。」という結びの言葉から伝わってくる。地域にかけるこの情熱は「今金読書と作文のまちづくり」活動の可能性を拓いていく大きな力になっている。

3.2 いまなぜおとなのためのお話しなのか

「いまなぜおとなのためのお話しなのか」

坂本孝子

読書と作文のまちをかかげ、数年たちました。

学力向上から始まった取組みですが、個人的には文庫を開いた私のライフステージでもあり、この方向はたくさんの枝葉を広げられる可能性がたくさんあるものと思われれます。

文字を読み解き、思考や想像をめぐらすことの出来る人間として、読書はたくさんの夢や冒険の世界にいざなってくれます。この世界は書き手も読み手もその世界を潜り抜けた時に、新しい自分に出会うことができたり、新たな生きる気力が湧いてくるものと思います。

そんな確かな力を与えてくれる世界に早く出会うことができるよう、古くから幼児教育では、お話や紙芝居、絵本や人形劇などを取り入れ効果があげられています。特に乳幼児の段階では、家庭の環境を整えるのも、図書室に連れてきてあげるのも、飲み聞かせ会や様々な文化にふれることも、親や取り巻く大人の積極的な理解にかかっていると思います。

大人が子どもにしてあげられること、しなければならないこと、それは環境を整えること。環境に願いを込めることではないかと思えます。暮らしの中に本や絵本を根付かせるには、取り巻く大人のチカラが不可欠なのだと思います。その大人自身も、生きてくうえで様々な困難に遭遇し、悩みながら日々の暮らしが営まれていることと思われれます。

たった1行の言葉がその心にぴったりと重なり、共感したり、感動したり、大人に焦点を合わせた朗読や本の紹介で、その魅力にふれる人が増えればと願っております。

町ぐるみの「読書と作文のまち」環境づくりは、じわじわ浸透するように、地道に良かれと思うことを続けてくこと。そうすることが、この町の文化を生み出し、根付かせていくことになると思っています。

次の世代に何を残すことができるのか。大人の課題であり、使命と思われれます。小さな力でも日々積み重ねていく努力を心がけたいと思えます。

3.2.1 坂本寄稿文からの考察

坂本は、幼児教育の仕事をリタイヤしてから「茶房らびど文庫」を運営している。「らびど」は「らぶ・ぴーす・どリーむ」の頭文字を取っての命名である。子どもたちに「らぶ・ぴーす・どリーむ」を届けるために大人がしなければならないのは「環境を整えること」である。坂本はこのようなミッションをもって「読書と作文のまちづくり」活動に携わっている。坂本らが企画した「大人のためのお話会」第1回目のテーマは「戦争」である。これは、「らぶ・ぴーす・どリーむ」を子どもたちに届けるために、大人たちが考えなければならない重要なテーマである。坂本は自らのミッションをもって「読書と作文のまちづくり」活動に参加している。坂本以外にもミッションをもった大人たちがたくさんこの活動に参加している。このことも今金の可能性を拓いていく大切な力になっている。

3.3 子育て中だからこそ取り組みたい活動

「子育て中だからこそ取り組みたい活動がある～絵本がつなぐ親子のこころ～」

鷲野咲恵

「お母さんこれ読んで」「いいよ、どれどれ」と、子ども達を膝に乗せ絵本を開く「絵本タイム」。私と子ども達の特別な時間。気持ちがほんわか温かくなる優しい時間。私が絵本を読むようになったのは長女が6カ月のとき、町が行うブックスタート事業に参加したのがはじまりでした。子どものためにと思っていた読み聞かせですが、一緒に読んでいると絵本には育児のヒントがたくさんつまっていて、初めての育児に戸惑う私にとって強い味方となりました。

気づけば絵本をいつもそばに置き、長女との絵本の時間が大好きになっていました。また、長女は日々成長し、言葉や字を覚え、次女を妊娠した時も絵本を見てはお腹の中の赤ちゃんを想像し、誕生を待ちわびました。7歳になった今では2歳になる妹に絵本を読んであげられるようになりました。こうして絵本のある生活は子ども達の成長の糧となり、忙しさを理由に余裕を無くしてしまう私に時々穏やかであることの大切さを思い出させてくれます。

そんな中、我が家が通う町の図書司書の方から「図書室から発行する図書だよりに寄せる作文を書いてみませんか？」との誘いを受けました。自信の無かった私ですが、絵本がもたらしてくれる温かなものが伝えられたらいいな…。と思い“絵本で触れ合う親子の心”と題して我が家の絵本タイムをテーマに書かせて頂きました。

これから間もなく、教育委員会の方から「作文を読んで感動しました。ぜひワーキングチームに入って家庭からの意見を」と声をかけてもらいました。絵本が大好きで読み聞かせの活動には興味があったものの、「意見する」となると「仕事で会議も出られないことが多いようでは迷惑をかけてしまう…。普通の主婦の私で役に立てるだろうか…。」と逃げ腰の私がありました。しかし「育児中の母親としての素直な意見を言ってもらえたら嬉しい」「会議も無理のない範囲で」の言葉にそれなら私にも出来るかな。と心が動き参加を決めました。それでもはじめは緊張と不安もありましたが、そんな私の心配をよそにワーキングの会議はいつも明るく和やかな雰囲気で開催、会議へ向かう足取りは回数を追うごとに軽くなりました。仕事や家事を離れ、様々な職業や年代のメンバーと話すことは私にとっても新鮮で育児の励みにもなっています。

今年の秋、町にある子育て支援センター内に設けられた“お母さんのための絵本コーナー”で一冊の本に出会いました。「ままがおこるとかなしいの」(せがわふみこ作)女の子が少し首を傾げた様子が優しいタッチで描かれた表紙とそのタイトルに私は胸がドキドキしました。手を伸ばしページをめくるたびその鼓動はさらに強く早くなり、私の目は涙がこぼれそうでした。頭に浮かんだのは小学1年生になった長女とのやりとり。その日も「早くしなさい」を何度も言って「早く起きないから遅れるの！ いてらっしゃい！」と叱りながら送り出してしまったのです。子どものことは母親の私が一番わかっていると思っていました。でも子どもが心の奥に抱える気持ちに気付いていませんでした。今朝、長女がどんな気持ちで登校したかを考えると胸が痛み、すぐにでも抱きしめてあげたいと思いました。

そしてその2週間後に控えていた読書と作文のまちワーキングチーム主催の「第2回大人のためのお話会」を担当することが決まっていた私は迷わずこの本を読もうと決めました。第2回大人のためのお話会のテーマは“育児”。このころの長女はまだまだ甘えたいのと自己主張したのが半分ずつで、それを成長として穏やかに見守ることの出来ない私は毎日張り合っていました。そんな中で子どもの気持ちを描いた本は、子どもが言葉に出来ない思いに気づかせてくれたり、読んだあとに愛しい気持ちにさせてくれ、子どもと張り合い、もやもやした私の心をすーっと落ち着かせてくれました。同じく育児を頑張るお父さんお母さんたちとそんな時間を共有できたらいいな。普段の生活の中ではなかなかじっくりと自分の時間が取れない中で少しでもゆったりと子どもを見つめる時間になったらいいな。こういう思いでお話会に取り組みました。

お話会では他父親メンバー2人と4冊の絵本を紹介しました。会場にはお母さん方や学校関係の方が足を運んでくれました。初めてのことで緊張し通してした

が、来てくれた皆さんの子どもを思う気持ちが熱いまなごしから溢れ、とても温かな空気をつくってくれ、最中から胸があつなくなっていました。また来てくれたお母さん方から「すごく良かった。共感できた。」と感想をもらい、私達の思いと重なることができたことにとっても感動しました。また、取り組みを支えてくれた仲間と、素晴らしい時間をつくってくれた参加者の皆さんに感謝しています。

こうして突如訪れたワーキングチームメンバーとしての活動は改めて絵本の魅力に気づかせてもらい、良い刺激となり、これまで仕事と育児に追われていると思っていた私に新しい居場所を与えてくれました。今後も一母親として「読書と作文のまちいまかね」の活動に少しでも力になれたらいいなと思います。

3.3.1 鷺野寄稿文からの考察

鷺野も「読書と作文のまちづくり」活動に積極的に関わっている。その関わりのきっかけは3つである。町が行うブックスタート計画、司書からの誘い、教育委員会の方からの誘い。鷺野にとって教育行政からの働きかけがブックスタートであり、読書と作文のまちづくり活動のスタートにもなっている。今金町では、教育行政も「読書と作文のまちづくり」活動を推進するための下地をしっかりとつくってきている。

鷺野は第2回目「大人のためのお話会」を担当した。鷺野が書いているように子育て中の親は「普段の生活の中ではなかなかじっくりと自分の時間が取れない」。それでも鷺野は「大人のためのお話会」を企画・開催してくれている。その原動力になっているのは「育児」というテーマを見つけたことである。このテーマは、前掲坂本の「らぶ・ピーす・どりーむ」ともつながってくる。とくに「読んだあとに愛しい気持ちにさせてくれ」る読書は、育児に必要な学びの機会になっている。子育て中の親たちが共有できるテーマを見つけて鷺野が企画した「大人のためのお話会」は大切なものを共感し合える会にもなっている。

鷺野は「取り組みを支えてくれた仲間」に対する感謝の言葉も記している。今金町では大人同士も「学び合い助け合う」豊かなコミュニティーの醸成がすすんでいる。このことも今後「読書と作文のまちづくり」を発展させていく原動力となっていくだろう。

3.4 学校の枠を越えた小学校教員の実践

「看图アプローチを用いたコミュニケーション講座に取り組んで」 田名部圭一

平成26年6月29日、今金町民センターにおいて第61回檜山女性大会が開催され

ました。この大会は檜山管内の7つの町の女性団体連絡協議会が一堂に会し、講演や分科会を通して研修を行うものです。4つある分科会の1つが『コミュニケーション教室～見ることを楽しみ、書くことを喜ぶ～』と題した、看図アプローチを用いたコミュニケーション講座でした。私は同僚の原田紗穂里とともに講師を努めさせていただきました。

そもそもこの分科会を設けることになったのは、以前に原田が今金町女性会の会議の際に写真を使って看図アプローチを行ったことを女性会の皆さんが覚えて下さったことがきっかけでした。その時の体験がとても好評で、女性会の方からぜひ女性大会でも行って欲しいということで依頼されました。

看図作文は普段は教育の現場で行っている実践ですが、こうして一般の町民の方から声をかけていただくというのはとても嬉しいことでした。

さて、コミュニケーション講座に取り組むにあたり私達が気を付けたことは、参加者の皆さんにどれだけ楽しんでいただけるか、どれだけ抵抗感や苦手意識を感じさせないようにするかでした。何回も打ち合わせを重ね次の3つのプログラムを組みました。

1つ目は、アイスブレイキングとして『ひみつの絵』という実践を行いました。これは、自分の持っている小さなひみつを絵に描き、絵を見せながら説明し、自己紹介及び自己開示をしていくものです。

絵を描くことに抵抗感をしめしていた参加者の皆さん。初めは戸惑いと困惑を見せていました。しかし、だんだんと慣れてくるとよい雰囲気になり笑顔で会話をする方が増えてきました。

2つ目は、絵を看るということに慣れるために「絵本の対話型読み聞かせ」を行いました。こちらは原田が担当しました。使用した絵本は『ドアがあいて』（エルンスト・ドゥル作・ノルマン・ユンゲ絵・斉藤洋訳 ぼるぷ出版1999年）です。この活動では、絵本を読み聞かせていきながらところどころで立ち止まり、絵をよく見せて絵に描いていることを質問したり、これからどなるのかなど話の展開についてペアやグループで交流しました。

絵本は子どもへの読み聞かせをするものと捉えがちですが、大人の参加者の皆さんも絵本の世界に引き込まれていき、絵に集中しているのが分かりました。ペアやグループでの交流も活発に行われていきました。

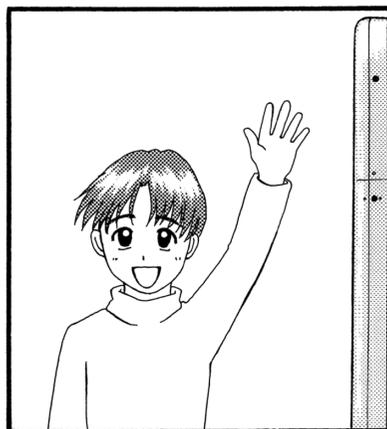
3つ目は「手をあげている少年」（図8参照）の絵図を使って簡単な看図作文を体験していただきました。長い作文を書くことにも抵抗感を感じるのではないかと思います、

ここでは絵図を読み解き、簡単な4つの会話文を作ってもらうことにしました。

ここまでの活動で心がほぐれ、絵を見るということに慣れてきた参加者の皆さん。絵図を提示するとすぐにコミュニケーションが始まりました。絵図の読み解きもたくさん意見が出されて盛り上がりました。最後の会話文を作る活動では参加者それぞれの個性があふれ、グループでの交流では笑顔でとてもいい雰囲気では話が弾んでいました。

分科会を通して参加者の皆さんには、絵をよく見るという体験の楽しさや、ただ話をするだけではなく、絵図や写真を通すことでさらにコミュニケーションが活発になることを感じていただくことができました。最後に「楽しかった、またやりたい」という言葉や「先生達の優しい声がけにとっても励まされました。」という言葉をいただき、本当に良かったと思います。

看図作文は普段は学校教育の現場で用いられることが多いです。しかし、今回一般の大人を対象に看図アプローチを用いてコミュニケーション講座に取り組み、参加者へのアプローチの仕方や反応など子ども相手に授業をする時と変わらないと思いました。学校現場だけではなく様々な場面で絵図を用いて色々な取組ができることが分かりました。子どもや大人という枠を超えてどこでもだれでもが楽しんでコミュニケーションがとれるという看図作文の幅広い可能性を感じることができました。この経験をもっとたくさん子ども達、町民の皆さんにしてほしいと思いました。



©yuki.ishida

図8 看図作文用絵図「手をあげている少年」

3.4.1 田名部寄稿文からの考察

この寄稿文に出てくる2つの用語の解説をまず行っておく。看图作文と看图アプローチである。

看图作文とは

看图作文は、絵図・写真等を見ながら作文を書き進めていく方法である。看图作文は、中国の国語（語文）教育でさかんに行われている作文指導法である。鹿内らは、中国式の看图作文に心理学の研究成果を取り入れた「あたらしい看图作文」を提案し、その授業方法開発を進めてきた。詳細は鹿内（2003, 2010, 2013, 2014）に紹介されている。

看图アプローチとは

鹿内は、中国の看图作文に「ビジュアルリテラシーを育成していく方法」としての可能性を見出した。そのため鹿内は、中国の看图作文に心理学や物語論の研究成果を取り入れ「新しい看图作文」を開発してきた。この研究から次のような成果が生まれてきた。「①読み解き活動を創発するビジュアルテキストの制作方法、②ビジュアルテキストを読み解く処理モデルの構成、③読み解き処理モデルを活用した授業づくりの方法、④ビジュアルリテラシーを育成する授業モデルの構築等々。」これらの成果を、作文教育以外の教育領域に適用していくことを「看图アプローチ」とよんでいる。

田名部らは看图アプローチを用いたコミュニケーション講座を実践してくれた。田名部と原田は今金小学校の教員である。小学校教員が「女性団体連絡協議会」という、学校とは直接関連しないフィールドで実践してくれたのである。田名部の寄稿文にも書かれているが、この実践も参加者には好評であった。田名部らの実践は、学校教育という枠を外した「読書と作文のまちづくり」活動の一例として高く評価できるものである。

現在、今金町の「読書と作文のまちづくり」活動の中で、学校での取り組みが少し手薄になっている。例えば、読書と作文のまちづくりは国語科の取り組みであると決め込んだり思い込んだりしている教員がいることなどは、その典型例である。学校で用いる教科書は、児童生徒が日常的に接する読書材である。さらに、全教科を通じて言語活動の充実をはかっていくべきことは、学習指導要領にも明記されている。これから学校での取り組みを充実させていかなければならない。田名部や原田ら、若手教員の実践は、学校で「読書と作文のまちづくり」活動の可能性を拓いてくれる力になるものである。

4 4名の寄稿文からの考察

4名の寄稿者は、いずれも本当に「こころよく」執筆を引き受けてくれた。今回の執筆は「読書と作文のまちづくり」の「作文」に相当する活動である。現在、教育の世界では様々な「リテラシー」が提案されている。例えば、読解リテラシー、自然科学リテラシー、メディアリテラシー、ビジュアルリテラシー、等々である。これらのリテラシー概念は、「情報を受容し発信する能力」ということを、定義の中に共通して含んでいる。「作文」は、この定義の中の「発信」にあたる部分である。今金町「読書と作文のまちづくり」活動では「作文」に関わる取り組みがまだ充分に行われていない。しかし、今回の4人の執筆者のように、作文活動に積極的に取り組んでくれる人たちが今金にはたくさんいる。このような人たちの助けも借りて、作文活動に広がりをもたせていく必要がある。これも今後の課題となる。

参考文献

- [1] 芦澤一洋 (1976) 『バックパッキング入門』, 山と溪谷社
- [2] 川嶋直 (1998) 『就職先は森の中 インタープリターという仕事』, 小学館
- [3] 望月善次 (2009) “国語科教育学の将来的展望に関する八観点”, 『月刊国語教育研究』, 第444号, pp.36-37
- [4] 鹿内信善 (2003) 『やる気をひきだす看図作文の授業－創造的[読み書き]の理論と実践－』, 春風社
- [5] 鹿内信善 (編著) (2010) 『看図作文指導要領－「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスン－』, 溪水社
- [6] 鹿内信善 (編著) (2013) 『協同学習ツールのつくり方いかし方－看図アプローチで育てる学びの力－』, ナカニシヤ出版
- [7] 鹿内信善 (2013) “読書と作文のまちづくり”, 『月刊国語教育研究』, 第489号, pp.36-37
- [8] 鹿内信善 (編著) (2014) 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ 協同学習の新しいかたち－看図作文レパートリー－』, ナカニシヤ出版
- [9] 渡辺豊博 (2005) 『清流の街がよみがえった 地域力を結集－グラウンドワーク三島の挑戦』, 中央法規

注1: 本研究の研究費の一部に日本学術振興会科学研究費(挑戦的萌芽研究)「読書と作文のまちづくりに関する実践的研究」(研究代表者: 鹿内信善, 課題番号 25590253)をあてた。

注2: 本報告のⅠは鹿内信善が執筆した。Ⅱは伊藤公紀が執筆した。Ⅲは小川ひとみ・坂本孝子・鷲野咲恵・田名部圭一・鹿内信善が執筆した。